

「周防国府」って??

時は西暦 600~700 年代…倭国から日本に呼び名が変わった頃、この国がひとつの国としてまとまってきました。その頃の中央政権は、法律による国づくり（律令国家）を進めるとともに、全国を管理しやすいように、地方をきちんと分けて整えていきました。こうした地方のまとまりは「国」と呼ばれ、日本全国に約 60 もありました。いまの山口県は「長門国」と「周防国」に分かれ、周防国をおさめる役所『国府』が、この国衙・多々良の地にあったのです。

時は流れ…西暦 1000 年を過ぎて武士の世の中になると、地方の役所はおとろえていきます。ところが、周防国は平氏に焼かれた東大寺の再建を請け負ったことや、その後も大内氏や毛利氏と関わりによって、国府の形や機能を少しずつ変えながらも残されてきました。江戸時代には『国庁寺』へと姿を変え、明治時代初期まではこの地に残っていました。

奈良時代からの「国府」の名残を引き継いできた全国でも稀有な遺跡で、「防府」という地名も「周防国府」から付けられたように、防府市には欠かせない重要な遺跡です。

国府がどこにあったのか、わからなくなっている地方が多い中で、周防国府はその存在をいまに伝える貴重な遺跡として、昭和 12 年に国史跡に指定されてから、今年で 80 年になります。昭和 36 年からは全国でいち早く発掘調査が始まり、50 年以上調査を積み重ねてきました。この間、いろいろな発見があり、古代以降の役所のようなすが明らかになってきました。

しかし、国守（国府役人の長官）が政務を執ったり儀式を行ったりする国府の中心建物『政庁（国庁）』については、その位置、規模、構造は、未だによくわかっていません。

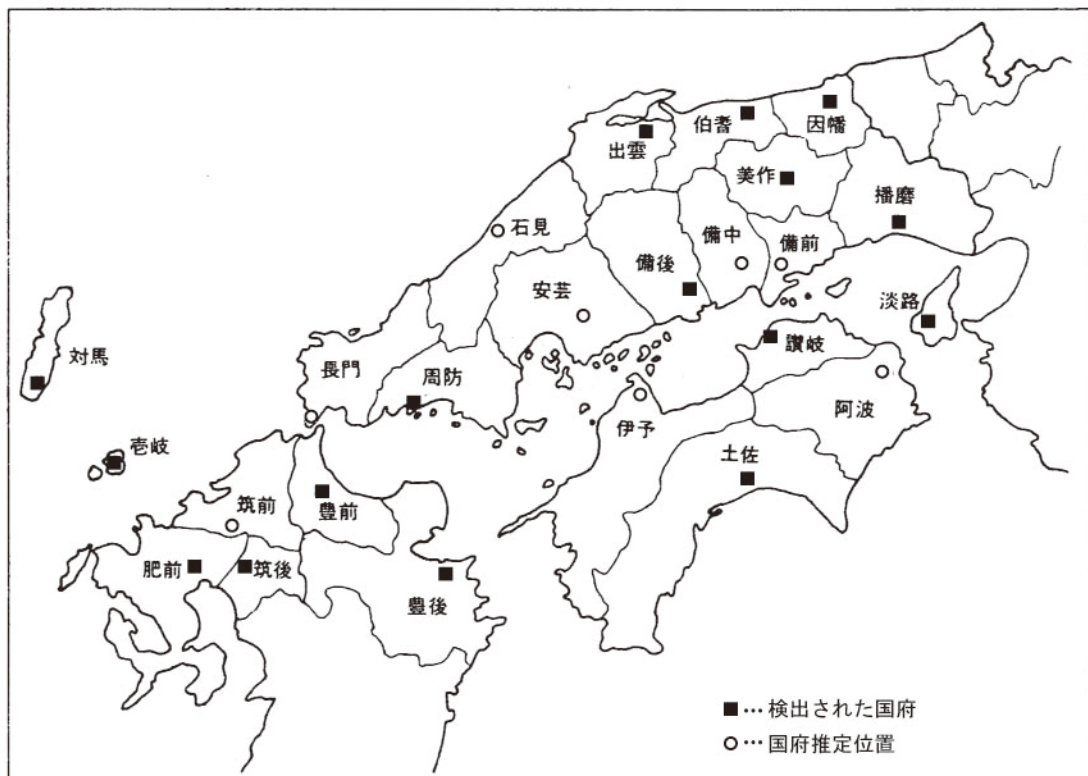


図 1 古代の日本の国々